

### \* 1983年6月11日のインドネシア日食の記念品の続報

アーカイブ室新聞 179号に1983年6月11日にインドネシアで皆既日食の記念品について記事を書いた。この日食観測には日本からは、地上班5グループ、気球班1グループの観測隊が派遣されており、隊長は日江井栄二郎氏であった。記念品は南部鉄で出来た文鎮のような重厚な置物(写真1)であった。表面には中心の黒い太陽の周りのコロナが描かれており、黒い太陽の中には1983年6月11日の日付、コロナの上に書かれた「GERHANA MATAHARI」の意味がわからず、またこの記念品がどのように使われたかもしれなかった。これらのことを調査して明らかになってから記事を書くべきとも思うが、こういった発見記は「鉄は熱いうちに打て」が筆者の原則である。



写真1 記念品の表

この記念品について、日江井先生にお尋ねの手紙を出していたところ、さっそく筆者を訪ねてくださり、いろいろお話を伺った。まず、「GERHANA MATAHARI」はインドネシア語で「皆既日食」という意味である。そして、この記念品は観測の後日作ったものではなく、予め製作し、現地でお世話になる関係者に配布したとのことであった。

また、観測隊のメンバーに緯度観測所の2人がおり、その内のお一人、佐藤弘一氏の発案で緯度観測所がある岩手県の名産である「南部鉄」で製作した重厚なものということであった。

インドネシアでは緯度観測所の観測機材が盗難にあうなど大変な思いをしたが、日本の宇宙科学研究所のような組織である「ラパン」が観測の援助をしてくださり、また京都大学の観測隊メンバーであった船越康広氏の祖父が「丸紅」の副社長をされており、「丸紅」からも大変な便宜供与を受け無事観測が出来たとのことであった。記念品の裏面には、観測隊が置かれたインドネシアの地名4箇所（写真2）が刻まれている。



写真2 裏面には観測地が書かれている